

接戦だった堺市長選

毎日新聞 6月10日夕刊は、堺市長選について「維新 想定外の紙一重」「都構想 警戒根強く」と大きな見出し。

リードから一昨日投開票された堺市長選は、大阪維新の会の新人、永藤英機氏(42)が、自民党を離党した無所属の新人、野村友昭氏(45)に競り勝った。3度目の「維新対反維新の戦い」での初勝利。維新は4月の大阪府知事、大阪市長のダブル選に続き、堺市長のポストも獲得したが、約1万4000票差の接戦で、堺市民の「大阪都構想」への反発や、警戒感の根強さも改めて浮き彫りになった。

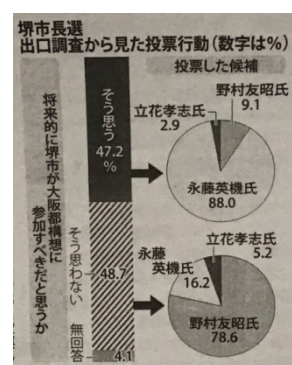
過去2回の市長選では、都構想反対を掲げた竹山修身氏に敗れた。堺は「反維新勢力」の牙城だったが、竹山氏が政治資金収支報告書への多額の記載漏れで自滅。維新の勢いに押され、選挙前は反維新勢力の「不戦敗」もささやかれていただけに、維新陣営にとって接戦は想定外だった。ダブル選や堺市議選に続く有権者の「選挙疲れ」もあり、投票率が低調だったことも競り合う要因になった。

維新は今回、堺で反発の強い大阪都構想の議論はあえて持ち出さず、竹山氏の辞職理由になった「政治とカネ」の問題の真相究明や市政の刷新を前面に打ち出す戦略を取った。大阪府や大阪市と連携した経済活性化などを強調したが、「反都構想」で結集する野村氏陣営に追い上げられ、告示前に明るみに出た丸山穂高衆院議員(日本維新の会から除名)の不適切な言動も逆風になった。

住民投票の容認に転じた自民党府連の渡嘉敷奈穂緒美会長は9日夜、「野村氏は推薦候補ではなく、コメントする立場にない」としながら、報道陣に「都構想の議論を積み重ねてほしいという民意だと受け止めた」と述べた。野村氏を支援した選対本部長代行の岡下昌平衆院議員(自民)は「身内から鉄砲玉が飛んでくるようなじくじたる思いがあった」と語り、府連会長の対応に不満を隠さなかった。

写真は同紙11日朝刊の出口調査から見た大阪都構想と関連づけた投票行動。堺市民も都構想の賛否が拮抗しており、それが投票した候補にも明確に反映している。都構想への賛否が、堺でも市民を大きく分断している。自民府連会長のコメントは、堺市民の「民意」を受け止めているのか、甚だ疑問だ。

10連休最後の5月6日、堺の「なかもず駅」近くの会場で行われた写真下の集いに参加した。超満員の参加があり、「自治都市」堺の熱気を感じた。この時はまだ候補者も決まらず、堺市民に焦りもみられた。こんな接戦になるとは。



(2019年6月12日)